

犬の車椅子：QOLの向上を目指して ～製作時の個別別調査および使用症例報告～

○山本和弘・井上みちる・井上香菜

帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科

【はじめに】近年、犬の遺伝的要因による歩行困難となる症例が多く報告されている。その要因は犬種特異性を示し、ダックスフントの椎間板ヘルニアやウェルシュ・コーギーの変性性脊髄症 (Degenerative Myelopathy:DM)がその代表的な例としてあげられる。発症すると後肢もしくは、四肢運動不全の症状を呈し、ヘルニアではヘミラミネクトミーなどの手術により回復する例もあるが、後遺症を残し運動機能の低下がみられる症例も少なくない。これらの症状をもつ犬について、本研究で、車椅子工房と協力し、オーダーメイドで製作する際の個別調査と使用状況とQOL(Quality of Life)の変化を調査した。

【方法および対象動物】

使用状況の調査:対象は、大阪市住之江区にある工房スノーピーにおいて、2013～2019年にかけて製作依頼された2106頭。調査内容は犬種、性別、年齢、体重、原因、車椅子の種類(2輪(写真1)もしくは4輪(四肢不全用)であり、車椅子発注時に各飼い主からの聞き取りによって行われた。



使用症例:(症例1)トイプードル、13歳、去勢済み雄。2019年4月にオーナー宅の火災発生時より後肢麻痺(正確な原因は獣医師診断も不明)。2019年10月より後肢補助用2輪車椅子を使用開始。(症例2)ミックス犬、推定16歳(保護犬のために正確には不明)去勢済み雄。高齢化に伴う姿勢保持筋肉量の低下による歩様困難、後肢麻痺。2019年9月より2輪車椅子を使用開始。

【結果】車椅子の受注を受けた犬種；コーギー734頭(35%)、ダックスが486頭(23%)で全体の58%、ついでミックス犬が104頭であった。性別；雄1238頭(59%)、雌865頭(41%) (不明3)。使用開始年齢(n=471、1～19歳)；13歳(76頭)まで増加傾向がみられ、それ以降、高齢になるとともに減少する(0～13歳の回帰分析($R=0.857$, $p<0.01$))。体重(n=726)；14kg以下が86%(627頭)を占め、とくに4-8kgの頭数は44%(322頭)となった。原因が明白な症例(n=242)中、コーギー(n=116)のDM(n=114)は98%；ダックス(n=69)の椎間板ヘルニア(n=55)は80%であった。2輪車椅子75%(n=1583)、4輪車椅子25%(n=523)の割合となった。また、2輪と4輪と年齢との関係は13歳以下(n=310、2輪;198、4輪;112)は2輪、14歳以上(n=162、2輪;52、4輪;110)は4輪の使用する傾向($p<0.01$)が強くなった。(使用症例)2症例とも車椅子による前肢駆動型の歩行を行い、散歩可能となった。とくに症例2では車椅子なしの歩行困難であったが、使用3ヶ月後には、筋力の回復が見られ車椅子なしで短時間の自走歩行が可能となった。

【考察】犬も高齢になるほど運動機能障害は多く、それに伴い発症例車椅子使用頻度も増加する。寝たきりになる症例も少なくないが、車椅子を使用することにより廃用症候群のリスクを低下させる。体重の結果からは日本国内では小型犬飼育の傾向が反映されたと推測される。原因別にはコーギーのDM、およびダックスのヘルニアが多く、近年の発症数の増加を反映している。高齢になるほど四肢運動機能が低下し、14歳以上になると4輪車椅子(四肢機能不全用)の使用頻度が高くなる。今回の症例の結果からも車椅子を使用することで、歩行や散歩が可能となり、排泄も容易になるなどQOLを向上させることが期待できる。